

大きいものに hyperplasy にても RI activity が認められるようだ。また前縦隔部腫瘍の malignant lymphoma には(+)と、非常に強い RI activity が認められ、malignant thymomaとの鑑別に困難があった。以上 benign thymomaにおいては、P.M.G. で認められるものは、<sup>75</sup>Se-selenomethionine にても abnormalな activity があり、患者への侵襲の程度を考えると、<sup>75</sup>Se-selenomethionine は、患者に負担を与えず、有力な情報を得るものと考える。

## 15. 脳シンチグラムにおけるドーナツサインの検討

渡辺 定雄 李 敬一

(青森県立中央病・放)

村沢 正実

(弘前大・放)

当院で1973年5月から1978年4月までに行なった<sup>99m</sup>TcO<sub>4</sub><sup>-</sup>による脳シンチグラフィー1,092件のうち、ドーナツサインを呈したものにつき検討を加えた。

1092件中 Positive scintigram は468件、375例で、そのうち術後変化によると考えられたものは除外して、頭部の病変によると考えられた327件、251例を対象とした。

Positive scintigram 中で、ドーナツサインを呈したものは251例10例で4% (327件中12件で3.7%) であった。これは脳シンチグラム総数の約1.1%にあたる。

10例の内訳は、Glioma 2例、Meningioma 1例、Brain abscess 2例、Metastatic brain tumor 1例、chronic subdural hematoma 2例、Giant aneurysm 1例、および臨床経過から脳浮腫と判定された1例であった。

Glioma では10.5% (19例中2例) に見られ、いずれも直径6cmを越えた Glioblastoma であり、cyst と necrosis が原因と考えられた。Glioblastomaだけでは25%の高率であった。

Meningioma では5.3% (19例中1例) で中心部の著明な石灰化が原因であった。

Cerebral abscess では40% (5例中2例) で、necrosis, capsule, 周囲の edema の組みあわせによると考えられた。

Metastatic brain tumor は5% (20例中1例) で肺の扁平上皮癌の転移で、周囲の脳浮腫のためと思われた。

Chronic subdural hematoma では6.7% (30例中2例) で発達した Capsule によるものである。

動脈瘤でドーナツサインを呈した1例は、中大脳動脈の7×5.3×3.7cmの中心が血栓化した巨大動脈瘤であった。

代表例を供覧しドーナツサインの意義について述べた。

## 16. び漫性肝疾患における肝シンチグラフィーの検討

高橋 弘

(磐城共立病・放)

須貝 吉樹

(同・内)

肝び漫性疾患のシンチグラムの鑑別のため、正常例45例、慢性肝炎例15例、慢性肝炎と肝硬変の合併例15例、肝硬変例55例を取り上げ検討した。シンチグラムは、<sup>99m</sup>Tc-phytate 約2mCi 注静1時間後に撮影した。各シンチグラムについて、肝の大きさ、肝内 RI 分布の不均一性、脾濃度、脾影長、脊柱部濃度の5項目を挙げ、各項目に0から+3までの得点を与え、その合計点数により判定した。

正面像のみで判定した場合、慢性肝炎の true positive は20%，肝硬変のそれは80%となり、慢性肝炎は正常例に近い得点を示すということ、さらに+5以上は肝硬変にしかみられないという点で、両者の鑑別は可能と思われた。脾濃度、脾影長、脊柱部濃度については、背面像で判定した場合、慢性肝炎の true-positive は0%，肝硬変例の